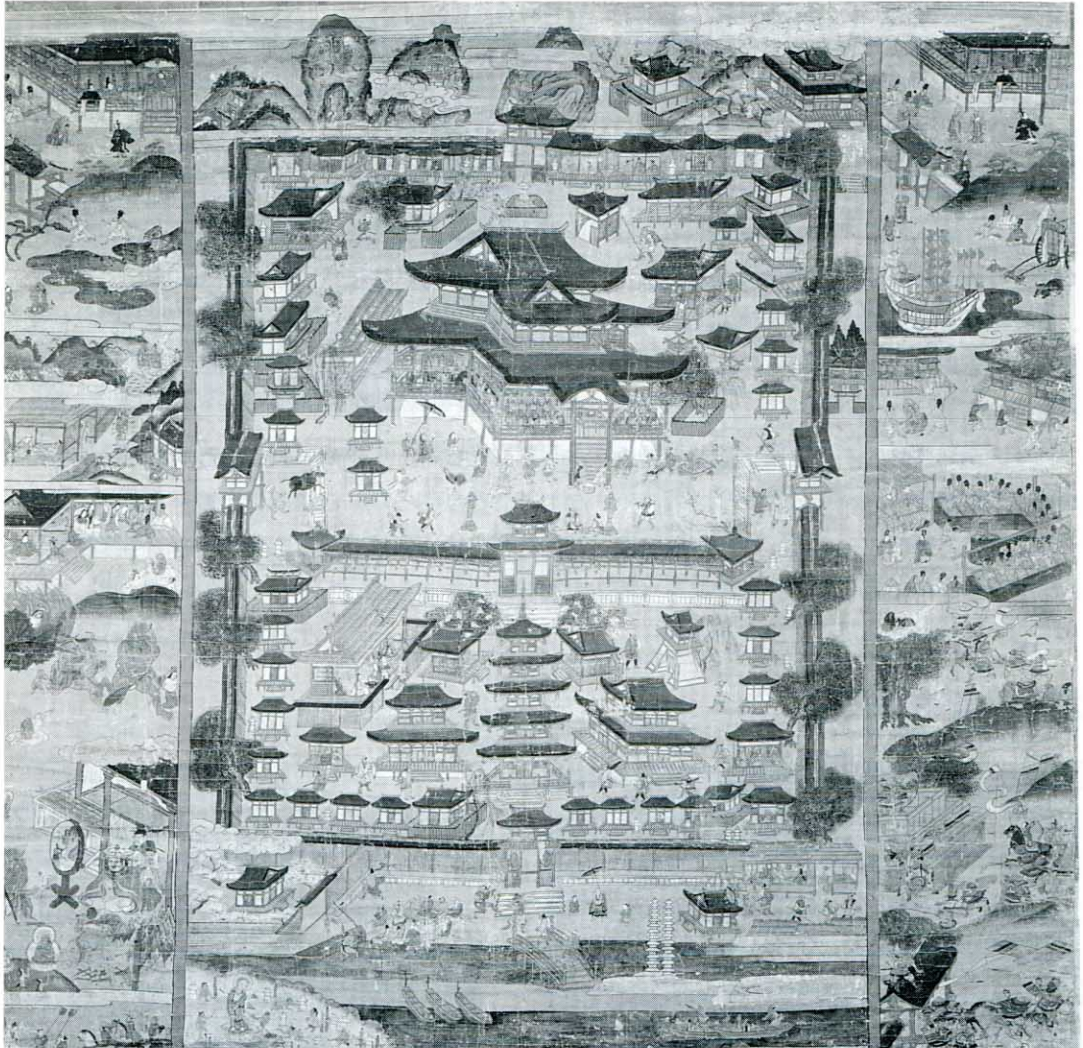


# 博物館だより

第32号



さんけいまん だ ら  
▲善光寺参詣曼荼羅（複製）

大阪府藤井寺市の小山善光寺で所蔵する曼荼羅の複製を作成しました。この絵の内容は、中世の信濃善光寺の様子を伝えるものと言われています。描かれた人々の姿には、たいへん興味が引かれます。

# 新たに確認された合掌形石室!

## — 山形県南陽市松沢古墳群 —

### 1. 合掌形石室とは…

長野市松代町に所在する大室古墳群は、約500基からなる群集墳で、信濃を代表する古墳群です。また群集性というのみではなく、その多くが石を用いた積石塚で、日本最大の積石塚古墳群を形成しています。

この大室古墳群に30基近くの合掌形石室を持つ積石塚がみられます。両手のひらを顔や胸の前で合わせる合掌にたとえた「合掌形石室」は、これまで「屋根型天井」<sup>おが</sup>、「拌み式」などと表現されましたが、昭和9年に栗岩英治氏が初めて「合掌石棺」と使いました。

合掌形石室は、特異な内部構造で、地域的にも長野盆地に集中（長野県外では山梨県東八代郡豊富村王塚古墳がある）してみられ、被葬者の性格をめぐる、渡来系技術者集団の可能性が考究されています。

近年の明治大学による大室古墳群の調査によって、10数基から構成される小古墳群が合掌形石室墳から築造が開始され、5世紀半ば頃までさか上ることが明らかにされています。

また大室古墳群以外では、<sup>たけはらささづか</sup>竹原笹塚古墳、<sup>すがまおうづか</sup>菅間王塚古墳、<sup>くわねいそらづか</sup>桑根井空塚古墳などがありますが、これらは合掌の規模が大きく、横穴式石室構造となっています。

### 2. 松沢古墳群



▲松沢古墳群1号墳の箱形石棺

箱形石棺の長軸が斜面に直交するように築造されている。石棺短辺側壁の外側に立てられた板石が見える。



▲松沢古墳群1号墳の妻側立石

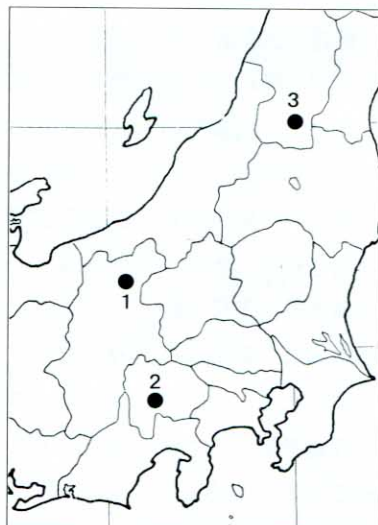
妻側の立石の上辺は三角形に整形加工され、屋根になる板石がずり落ちている。

山形県南陽市の松沢古墳群は、米沢盆地北部の山の中腹南斜面に築かれた古墳で1号墳は標高340mで比高60m、2号墳は標高380mの地点に立地しています。1号墳が昭和31年、2号墳が昭和42年に発見され、昭和52年には、佐藤鎮雄氏らによって測量調査が実施されています。それによると、1号墳の石棺は長さ237cm、幅120cm、深さ45cm、2号墳は長さ180cm、幅82cm、深さ47cmとなっています。ともに埋葬施設はすでに露出していましたが、周囲の状況から積石による墳丘を有すると思われます。



#### ▲松沢古墳群 2号墳の妻側立石

1号墳と同じ石棺短辺側に板石を立て、合掌状に板石を架している。1号墳、2号墳とも、山側の屋根根石のみかろうじて残った。



- 1：大室古墳群 2：王塚古墳  
3：松沢古墳群

これまでに、『山形県史』に1号墳、『南陽市史』考古資料編と通史編に1号墳と2号墳が取り上げられ、『日本古墳大辞典』にも登載されています。これらの文献には、積石塚、箱形石棺、蓋石が切妻型の屋根のように組まれていることが指摘されています。しかしながら、屋根状の板石の一部しか遺存していないためか、合掌形石室と断定するに至っていません。

私は、昨年11月末に現地を調査し、間違いなく合掌形石室墳であることを確認しました。内部構造は、大室168号墳と同じく、箱形石棺の短辺の側壁外側に縦に板石を立て、上辺を三角形に整形加工し、これに板石を屋根状に架けたようです。この形態の合掌形石室は、大室にも類例が少なく、全容はつかみ難いですが、石棺短辺の両側に板石を立てるのではなく、奥壁に相当する片側のみに板石が立てられるのではないかと思います。松沢古墳群1号墳及び2号墳、大室168号墳などは、石棺の片側のみに立石状の板石が遺存しています。

松沢古墳群は、出土した土器から6世紀前半期の築造年代が与えられ、後期古墳の枠の中で考えられているようですが、合掌形石室の構造から言えば、5世紀後半代に位置付けてもいいのではないかと思います。

### 3. 合掌形石室の歴史的意味

長野盆地と甲府盆地の王塚古墳に加えて、東北の山形県に積石塚で合掌形石室の古墳があるとはだれも予想しなかったことです。また合掌形石室の構造からいっても、大室に類例の少ないタイプが、山形で2例確認された意味は大きいと言えます。今後、とんでもない所から発見される可能性ができました。

最近、玄界灘に浮かぶ福岡県相ノ島で、161基の積石塚群の発見が報じられました。横口系石棺で5世紀代に属すとみられています。合掌形石室はみられないようです。

大室古墳群については、特異な内部構造である合掌形石室墳が渡来系の馬の飼育にかかわる技術者集団の墓制ではないかと指摘されています。大室古墳群（長野盆地）、松沢古墳群（米沢盆地）、王塚古墳（甲府盆地）という異なる地域での合掌形石室構造、築造年代、分布状況、立地環境などを比較検討する必要があります。果して、渡来系なのか否か、馬にかかわる技術者集団なのか否か、日本海ルート of 伝播か否かといった問題について考える時、合掌形石室墳の動態が大きな鍵をにぎってくると言えます。

松沢古墳群での合掌形石室の確認は、大室古墳群での特異な合掌形石室の構造を見直す契機になり、新たな展開を予測させるものとなりました。

（文責 山口明）



ひばたせつこ  
▲樋畑雪湖氏の大室168号墳のスケッチ

大正15年に松代町の樋畑雪湖氏がスケッチしたもの。当時、大平喜間<sup>きまた</sup>多氏がこの古墳を発見したので、太平塚と仮称していた。

## 茶臼山自然史館玄関のひさしが完成

このたび茶臼山自然史園の玄関口に六角の屋根と2本の支柱からなるひさしが完成しました。

玄関口は博物館にとって来館者への「顔」ともいえる重要な部分です。これまで、自然史館では来館者から入口がどこにあるかわかりにくいとのご意見がよせられることがたびたびあり、玄関口の整備が必要になっていました。今回完成したひさしは、色調や外観も自然史館の既存の建物との調和を考えて設計したものです。今後は玄関ホールの展示物の整備も進めて、自然史館の「顔」をますます魅力のあるものにしていきたいと考えています。



博物館だより №32 1995.6.23  
編集・発行 長野市立博物館  
〒381-22 長野市小島田町1414  
☎ (0262)84-9011